

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

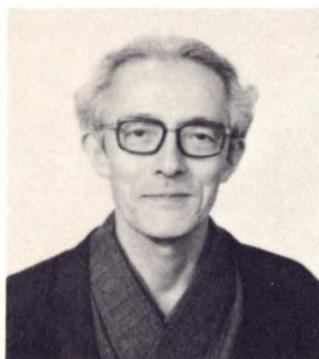
会長：小杉善二 幹事：塩村喜代次

情報委員長：米沢修一

1980・6月12日 第167号

“郷土における茶道の歴史”

裏千家茶道教授 大島 宗古氏



金沢の地に茶道を取り入れたのは利家、利長公さらに千利休七哲の一人と言われた高山右近である。

以来京より金森宗和、江戸から小堀遠州の二流が入るに及び茶道は武将の修養、嗜として盛んに行われるようになる。

武備より大平の世に対処すべく美術工芸に力を注ぐ利常代になると京都より仙叟宗室を招き所謂茶の心髄とも言うべき佗の茶を広め侍中心の茶道が次第に町方へと移って行くのである。名器の収集での安宅コレクション、畠山美術館などは時代をさか上れば、この地にこうした茶道の素地があった代表的なものではなかろうか。

幕末、前田家が多く蔵品を放出、美術品に対する土地の識者の目を心を膨らませて行った。明治に入り実業家が名器の収集に力を入れ、一時期は高橋箒庵をして「金沢の富のほとんどは骨董品である」と、言わしめている位である。しかし大正になると豊潤な財界人から茶道は一般レベルへと浸透し、家々の数寄者が夫々の格において釜を掛け茶を楽しんだ。明治の頃の名器を中心とした茶も少しずつ減って行くのである。

その後、茶道も苦難な時を経るが、持ちこたえ戦後は日本の心として外国にも理解されるになり国際親善の一役を荷っている。

今日数の上では盛んな茶道も形だけでなく本当の茶の心を理解しなければならない。私達は淡交会という裏千家の組織の中で利休居士の理想を追求すべく精進している。

今年も尾山神社での献茶式が行われる。この意義深い行事に利家公はじめとして一盃の茶を差し上げられることは又嬉しく想うのである。

—金沢北RC例会講話から— (文責 米沢修一)

私の職業奉仕

才田 次男

私は昭和22年1月、北国銀行員としてスタートしてから、銀行員としての心構え、実務の両面から、多くの先輩、上司の方々から、或は書物によって教えられてきましたが、振り返って見ますと銀行員という立場だけで信用を戴き、或は多くの方々とお近づきをいたゞいたり随分有利な点が多かったのではないかと考えます。然しそれに対し如何に報いてきたかを考えますと、恥入ることばかり多くて申し訳なく存じます。

私の手許に、昭和初期の金融界の先覚者であった一瀬栄吉氏が書かれた「銀行経営私観」という小冊子があり、これを座右の銘としております。この小冊子は、十数年前に当時の本陣頭取より、銀行に職を奉ずるものにとって心得うべきこととして熟読玩味し、自らの修養と向上に資す可しとして配布されたものです。内容は正に名言の集成で、一言一句が至言の集りであります。



ほんの一部をご紹介しますと、先づ「経営は人に在り」から始まり、「銀行は個々の取引を尊重すると同時に、国家社会上大きな任務を帯びていることを忘れてはならない」と説き、「銀行と顧客とは互に杖となり柱となって自他共栄の精神を以て共に堅実な歩調を取ることが必要である」。又融資に当っての数々の心得の中に、「すべて取引は、全行員の承服で得る透明なものでなければならない」と戒めております。

最近新聞を賑わしている相互銀行の欠損や大会社、官庁の不明朗会計等は、この経営の真理をおろそかにした結果であると考えます。締め繰りの言葉の中に「今まで述べてきたことは、極めて平凡なことばかりであるが、真理は平凡の中に在る」旨を述べてあります。

世はコンピューター時代に入っても、数十年前に書かれたこの小冊子の内容は今もって真理であります。

私は現在電算機関係の業務に司はっておりますが、何れのシステムを組立てる場合でもその中に一つの理念を持たないと、そのシステムは単なる道具であったり、或は重大な欠陥を持つことがあります。

私の場合、先づ銀行を利用されるお客様に真に役立ち、且つ銀行の合理化になるものであり、事故防止に万全であることを基本的の思想として組み込む様にしております。

最近当クラブに入会させていたゞいてからロータリー関係の書物を読みますと、この小冊子の内容とロータリー精神がまさに一脈相通ずる所があることが判りました。

どうか今後共宜敷くご指導方お願い申し上げます。

